

青年の甘えの背景に関する調査研究

A Study of the Background of “Amae”

篠原しのぶ・原崎聖子

キーワード：甘え 経済観念 愛他行動 幼少期の親の養育 日本人的価値観

【はじめに】

「甘え」という概念は日本特有の感情であると解釈されることが多い。我々も1996年以来、そのような方向性を持って、いろいろな角度から「甘え」に関する調査を実施し、分析を行ってきた。その中で、果たしてそう言い切ることができるであろうかという疑問が常に付きまっていた。

李御寧氏は、その著『縮み思考の日本人』の中で、「韓国にも「甘え」に相当する言葉は、それこそ路傍の砂利のように存在する」と言っている。「ウンソク」や「オリグアン」がそれにあたり、いずれも、幼い子どもが親に抱きつく時のしぐさを指しているようである。さらに、「オムサル」という言葉は、大げさに痛がったり、苦痛を誇張して訴えることによって他者にもたれかかることを意味する言葉として存在するし、これらはいずれも日常生活でごく自然に用いられていると述べている。

また、諸外国の文学の中にも「甘え」が頻繁に見え隠れしている。2003年3月に卒業した学生が卒論で扱ったサン・テグジュペリの『星の王子様』という書物をもう一度読み返したが、その文章の中に、狐との問答がある。王子様から「一緒に遊んでくるよう」頼まれた狐の返事の中に、「飼いならされていないから遊べない」「飼いならすとはつながりを持つということだ」「かけがえのない存在になるということさ」等の会話がある。これらの会話を見ていると、「飼いならされる」という言葉は日本流に言えば、「手なずける」或いは「なつかせる」という意味を含んでおり、これこそ「甘え」と共通する表現ではないかと読み取れる。

本学教授の平川祐弘氏は、ダンテの『新曲』のなかのウェルギリウスとダンテの関係が「甘え」の関係であると説いている。更に母親が子どもの不安を察知し、子どもがこれを受けて甘えるように、ウェルギリウスをダンテが安心させようとしているのだと氏は解釈している。

更に誰の講演であったか忘れたが、「妬んでいる」人、本人は、「自分は妬んでいる」という自覚を持っていないで、ただ、“unfair”だと感じて不平を言っているだけだ、しかもその不平を吐露する相手を持っていることでその人の気持は救われているのだ、という意見を聞いた

ことがある。不平を吐露する相手に甘えていると言っても良いのであろう。

そこで新約聖書に出てくるいくつかの不平を思い出す。第1は、マタイによる福音書に出てくるぶどう園に雇われて働いた人たちが、労働時間の長短に関わらず様に1デナリオンを支払われた時に、長時間働いた労働者たちが主人に不平を言っているところ（マタイ20章）である。二つ目は、弟が父親から分けてもらった財産を放蕩の末使い果たして食べるものにも困って父の元に返ってきたところ、父親は今まで兄がしてもらったことも無かったようなもてなしをして歓迎した。これを見た兄が父親に不公平だと文句を言ったという件りである（ルカによる福音書15章）。更にもう一つは、イエスがマリアとマルタの家を訪ねたときのこと、イエスをもてなすために一人忙しそうに働いていた姉マルタは、一切手伝わずにイエスのそばで話に聞き入っている妹マリアを妬んでイエスに「マリアも働くように言ってほしい」と訴えたという話である（ルカによる福音書10章）。

つまり長時間働いたのに1時間しか働かなかった人と同様1デナリオンしか貰えなかったために雇い主に不平を言った労働者、放蕩の末財産を使い果たした弟を歓迎する父親に文句を言った兄、もてなしを手伝わずにイエスの話に夢中になっている妹を働かせてくれとイエスに訴えた姉、いずれも、不平を言ったり、自分の気持ちを訴えたり頼んだりすることの出来る相手を持っていたのである。つまりその人たちに甘えを表現したということになりそうである。

そういえば聖書にはこのような話が随所に出てくるように思える。

更に土居健郎はその著「甘えの思想」の中で、『「甘え」は、子供でも、無学な者でも使う日常語で、定義を必要としない、いわば自明の語である』と述べている。

そこでわれわれも敢えて「甘え」を概念化することをせず、「甘え」という言葉から連想される行動現象、或いは、「甘え」に関する文献の中に登場する言葉を中心に質問を作成し、帰納的に甘えについて考えていくことにしてこれまで研究・分析を重ねてきている。

しかも2000年昔に書かれている新約聖書においても、また、諸外国の文学の中にも甘えがあるということが確

認められたとするならば、日本人の「甘え」を表す行動と、諸外国のそれとを比較してみることも、性差や年齢差を比較してみることも、共に有意義なことであるということが出来よう。

われわれはこれまでの研究において、「甘え」という言語から連想される行動、欲求、感情等の諸現象を著すものを100程度選び出して質問項目を作成し、高校生、大学生、成人の男女を対象に、日本人だけでなく外国人をも含めて調査を繰り返してきた。その結果を踏まえて因子分析を行い、6個の因子の抽出をすることができたことは、過去の論文で報告済みである(篠原・1999)。

しかも、我々が作成した質問項目が『本当に甘えを捉えているのか』という疑問に対する検討を加えた結果、これらはすべて、日本人の青年・成人から、「確かに甘えである」と捉えられていることが確認されたことも、以前の論文『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ』(篠原・原崎2000)において報告した通りである。

このような背景を受けてわれわれは、中国、アメリカの大学生男女、カナダ在住の日本人成人男女を対象に調査をしたが、何れの国においてもそれぞれに性差が確認され、日本の大学生が最も甘え得点が有意に高いこと等も確認された(篠原・原崎2001、2002)。更に、高校生、大学生、社会人の男女の調査結果においては、年齢を追うごとに甘え行動が変化し、社会人においては職種によっても有意な差が認められた(篠原・原崎2002、原崎・篠原2003)。

そこでわれわれは、核家族化、少子化に代表される現代の日本社会に目を向け、「甘え」の背景を探り、大学生女子が、幼少の時期に受けてきた両親からの養育の様子、現在の生活意識、経済観念、愛他性等と「甘え」との関係を見て関連を分析すると同時に、将来「妻」あるいは「母親」になるであろう女子学生が、家庭生活において配偶者に期待する事柄、そして期待されていると思う事柄を調査し「甘え」との関係をもっと詳しく考察していきたい。

【調査手続き】

調査対象者	女子大学生 合計 236名 (福岡市内と長崎市内の女子大学生) (参考資料として中国女子大学生125名)
調査時期	平成15年6月 ~ 11月
調査内容	甘えに関する質問 30問 親の養育に関する質問 16問 経済観念に関する質問 26問 生活意識に関する質問 25問 愛他性に関する質問 21問 配偶者への期待 28問

配偶者からの期待予想 28問

(何れも5：非常に当てはまる～1：全く当てはまらないまでの5段階で評定する)

それぞれ授業時間中に質問紙法にて調査

【結果と考察】

I. 幼少期に両親から受けた養育と「甘え」の関係

現在の大学生が幼少時にどのような養育を受けたかについての16問に、5段階評定をさせた結果を得点の高い順に示したものが図1である。

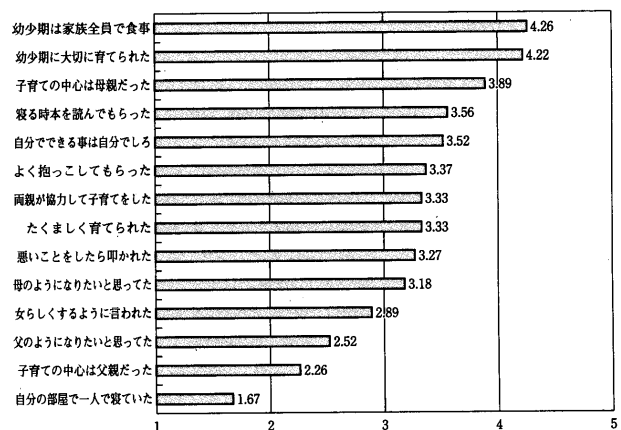


図1. 幼少期に親から受けた養育

図から明らかなように4.00以上の高得点を示したものは、「小さいころは、食事時に家族全員が集まっていた(4.26)」、「幼少期に両親から大切に育てられた(4.22)」の2項目でありこれに「子育ての中心は母親であった(3.89)」が接近して続いている。またこれとは逆に、2.50以下の低得点を示したものは「幼少期から自分ひとりの部屋で寝ていた(1.67)」が極端に低く、これに「子育ての中心は父親であった(2.26)」、「小さいときからお父さんのようになりたいと思っていた(2.52)」が続いている。

これらの結果から、現在の大学生が幼少であった頃すなわち、15年ほど前の家庭では、両親から大切に育てられ、一家団欒の機会の多い暖かい家族関係の中で成長している様子が伺われる。学生たちはこのような中で母親の存在を大きく感じ取って成長しているのに対して、父親の影、そしてその影響力の薄さが明らかになった。ちなみに、中国の大学生女子の場合は、子育ての中心が母親であったのは2.96に過ぎないのに対し、「お父さんのようになりたいかった」のは3.08、「自分ひとりの部屋で寝ていた」のが2.99と、日本の学生の評価より優位に高く、かなりの差が見られる(原崎、篠原2003)。

更に、「寝るときに本を読んでもらったり話しをしてもらった(3.56)」、「よく抱っこしてもらった(3.37)」等、親との親和的接触の様子が見える一方で、「幼少期から自分のことは自分でするように言われていた

表1. 甘え因子と幼少期の養育との関係

	甘えの因子	引っ込み思案		受容承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
		高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
	甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
	人数	122	105	123	104	111	116	120	107	130	97	143	84
105	小さいころは食事時に家族全員が集まっていた											高<低+	
107	幼少時から自分でできることは自分でするよう言われて育った	高<低*						高<低+		高<低*		高<低+	
110	子育ての中心は父親であった					高<低+							
116	小さい時からお母さんのようになりたいと思っていた			高>低+									
117	幼少時に両親から大切に育てられた	高<低*				高<低***							
118	幼少時にたくましく育てられた	高<低***						高<低***		高<低*		高<低***	

(3.52)、「幼少期にたくましく育てられた(3.33)」「幼少期、悪いことをしたら親からたたかかれていた(3.27)」というように、かなりしっかりした家庭教育を受けて育ったことが読み取れる。ただ「小さいころから女らしくするように言われていた」に対する回答は、2.79と3.0を下回っており、男女平等意識が高まっている日本の社会情勢を物語る養育が幼少期から行われていたものと思われる。このことは、1992年に福岡市内の7行政区から各1校を対象に、小・中・高校の児童生徒の調査をした折にも、学校内では男女の差別教育を意識しているのに対して、家庭において男女が差をつけて育てられていないと感じていることが明らかになってきたことに通じるものであろう(篠原, 1992)。

更に「甘え」6つの因子別に、夫々高得点群と低得点群とに分けて、幼少期に受けた養育の状況との関連を見よう。表1に、その結果を、統計的に有意な差があったものを中心に示している。

「幼少期から自分でできることは自分でするよう言われて育った」学生達は、『引っ込み思案』『責任回避』『非自立』『追従』の甘えがいずれも低いことがわかる。また、「幼少時にたくましく育てられた」と回答する学生達も同様に、『引っ込み思案』『責任回避』『非自立』『追従』の甘えのいずれも低群に属している。更に、「両親から大切に育てられ」た場合も『引っ込み思案』『屈折』の甘えの低群に多いし、前述のとおり非常に得点の低かった「父親が子育ての中心」であった場合も、『屈折』低群である。

このように見てくると、幼少時の適切な育て方が「甘え」を低減するのに大いに役に立っているといえるようである。『受容承認を求める甘え』だけは、高群に、「お母さんのようになりたい」と思いながら育った学生が多いことも特筆に価するであろう。

以上見てきたとおり、幼少期にどのような養育を受けていたかということが、6個の甘え因子すべてと深い関係にあることが明らかになった。

II. 経済観念と「甘え」との関係

経済観念に関する意識を調査する項目を26項目作成し、これを因子分析した結果、「すねかじり因子」「計画的使用因子」「浪費因子」「質素・儉約因子」「自立志向因

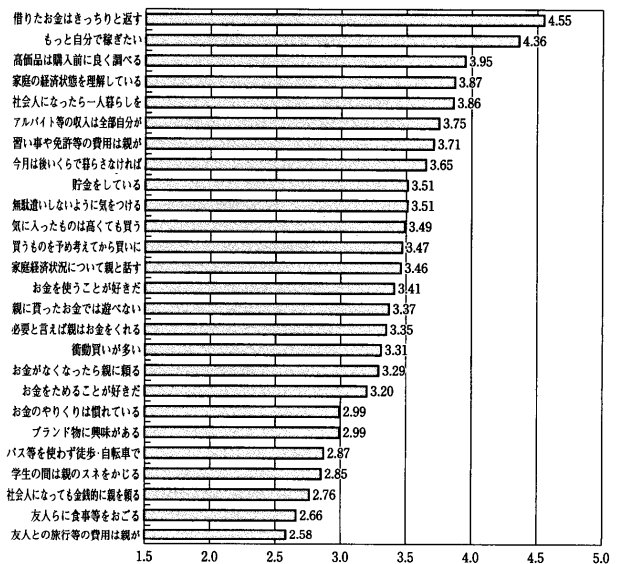


図2. 経済観念

子」「貯蓄志向因子」の6因子が抽出された(篠原・原崎2002)。これをもとに今回調査した26項目の結果を高得点順に並べたものが図2である。

まず高得点を示した項目は「借りましたお金はきちんと返す(4.55)」、「もっと自分で稼ぎたい(4.36)」、「高いものは事前に良く調べてから購入する(3.95)」等であり、逆に低得点を示した項目は「友人との旅行費用は親が出してくれる(2.58)」、「友人らに食事などをおごることがある(2.66)」、「社会人になっても金銭的に困ったときは親を頼ると思う(2.76)」、「学生の間は親のスネをかじりたいと思う(2.85)」等である。

これらの高得点項目、低得点項目をあわせて見てみると、経済的にはできるだけ親の世話にはならないで生活したいと思っており、したがって、「自分でもっと稼ぎたい」という欲求が高く、「高いものを買うときには慎重に」考えてからしか手を出さず「友人に食事をおごる」事が少なく、支出を控えている。また、「借りましたお金はきちんと返す」など、金銭的にはかなりしっかりした考えを持っていることがわかる。これは、女子学生たちが「家庭の経済状態を理解している(3.87)」ということからも裏付けられるであろう。更に今回調査対象になった大学が、国公立と比較して授業料の高い私立大学であるためこれ以上親のスネはかじれないという気持ちを持っている結果であるとも考えられるが今後の検討課題

表2. 甘え因子と経済観念との関係

	甘え因子名	引込み思案		受容承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
		高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低
		123	105	123	105	123	105	123	105	123	105	123	105
32	買うものをあらかじめ考えてから買いに行く							高<低*		高<低***		高<低*	
33	バス等を使わずに徒歩・自転車で用事を済ます			高<低+				高<低+		高<低*			
34	もっと自分で稼ぎたい	高<低*											
36	借りたお金はきっちり返す							高<低**		高<低*			
37	貯金をしている							高<低+		高<低***			
38	お金のやりくりは慣れている	高<低**				高<低+		高<低***		高<低***		高<低*	
41	衝動買いが多い			高>低*		高<低*		高>低+		高>低+			
42	ブランド物に興味がある			高>低*								高>低*	
43	アルバイト等の収入は全部自分が使用する			高>低+									
44	無駄遣いはしないように気をつけている			高<低+				高<低+					
46	お金を使うことが好きだ	高<低+				高>低+		高>低***		高>低+		高>低*	
47	今月はあといくらで暮らさなければと思うことがある	高<低*											
48	家庭の経済状態を理解している							高<低*		高<低***		高<低*	
49	友人との旅行等の費用は親が出してくれる			高>低*						高>低***			
50	お金が無くなったら親に頼る							高>低+		高>低***		高>低+	
51	習い事や車の免許にかかる費用は親が出してくれる	高>低*		高>低+						高>低*			
52	普段でも必要といえれば親はお金をくれる									高>低+			
53	親にもらったお金では遊べないと思う							高<低+		高<低*		高>低+	
54	学生の間は親のスネをかじりたいと思う			高>低+						高>低***			
55	社会人になっても金銭的に困ったときは親を頼ると思う									高>低***		高>低*	

であろう。

次に甘え各因子ごとに、それぞれ高得点群、低得点群に分けて経済観念との関係を見てみよう。有意差が見られたものの方向性を示したものが表2である。

『屈折の甘え』以外では、49の「友人との旅行等の費用は親が出してくれる」から、55の「社会人になっても金銭的に困ったときは親を頼る」までのすねかじりの因子に属する殆どの項目で、甘え高群の方が低群より有意に高得点を示している。中でも『非自立の甘え』においては全ての項目ですねかじりを強く示しており、甘え度の高いものは経済的に親を頼りにしているということがわかる。「親にもらったお金では遊べない」だけは低群の方が高得点を示しているが「非自立」傾向が低いということであるので方向性としては同じである。

その他の各「甘え」因子においては甘え傾向の低群の方が、32「買うものをあらかじめ考えて買う」等のような『計画性』、33の「バスなどは使わず徒歩・自転車で用事を済ます」などのような『節約』傾向が高くなっている。また、37の「貯金をしている」等の『貯蓄』因子も甘え得点低群が高くなっている。これに対して46「お金を使うことが好きだ」等の『浪費』の因子は逆に甘え得点が低いほうが浪費傾向が少ないということが明らかであった。

以上の結果から、経済観念と甘えとの関係が非常に深いということが言える。

Ⅲ. 生活意識と「甘え」との関係

大学生の「甘え」の背景に、彼らの日常生活意識が存

在することが考えられる。そこで我々が作成した25の質問項目に回答してもらった。

この生活意識測定項目は最初60問作成していたが、因子分析の結果次のような5因子が抽出された。すなわち、「女性のほうがこまやかな心遣いができる」「女性のほうが身の回りの世話が良く出来る」等を含む『伝統的女性性の因子』、「男性の方が決断力がある」「男性のほうが社会的視野が広い」等を含む『伝統的男性性の因子』、「自分の考えに基づいて判断する」「自分の責任で行動する」等を含む『自己責任性の因子』、「親は私の話をよく聞いてくれた」「親と話すのが楽しかった」等を含む『親との親和性の因子』、「礼儀を守るよう親から厳しく言われた」「親は決まりを守るよう厳しく注意していた」等を含む『親の厳格性の因子』の5因子である（篠原・原崎2001）。

そもそも、個々人の生活意識や価値観は、この世に生を受けて以来どのような環境の中で成長したかによって大いに差が現れるものである。自然環境、両親の養育態度、友人関係、宗教・文化的背景等々、影響源である環境の種類は多岐にわたっている。日本においては特に人的環境からの影響力が非常に大きい。例えば、身近にいる親を中心とした年長者から、良いことは誉められ、悪いことは叱られる中で善悪を身につけていくであろうし、きょうだいや友人のように周りにいる同年代のもの達の態度・行動によって自らの行動を制御して育つと考えられる。

そこで、今回はこれら5因子25項目を用いて生活意識と「甘え」行動との関連を分析し、考察を進めていく事とする。

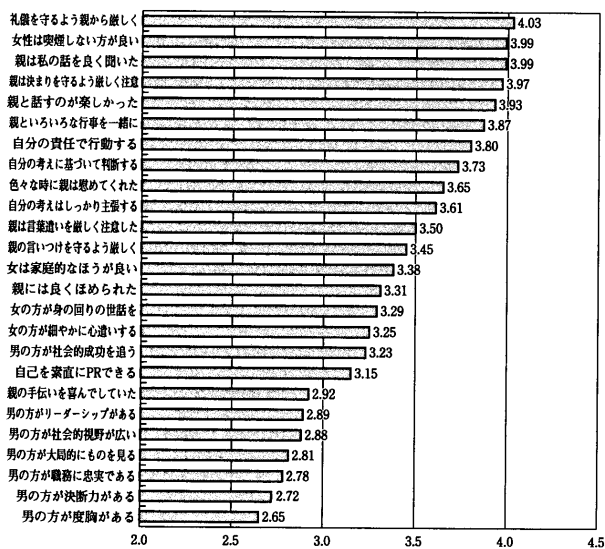


図3. 生活意識

各項目を高得点順に並べたものが図3である。

まず高得点を示した項目は、「礼儀を守るよう親から厳しく言われていた (4.03)」、「親は私の話を良く聞いてくれた (3.99)」、「親は決まりを守るよう厳しく注意していた (3.97)」等であり、これに「親と話すが楽しかった (3.93)」、「親はいろいろな行事を一緒にやってくれた (3.87)」という項目が続いている。即ち親の『厳格性』、『親との親和性』等が上位にきており、幼少時の親とのかかわりの密接さをうかがわせる。

これに対して低得点を示した項目は、「男性のほうが

度胸がある (2.65)」、「男性のほうが決断力がある (2.72)」、「男性のほうが職務に忠実である (2.78)」から「男性のほうがリーダーシップがある (2.89)」まで軒並み『伝統的男性性』の因子が低いところに並んでいる。つまり女子大学生は男性に対して『伝統的男性性』をあまり感じていないということが明らかである。

先行研究におけるこれら男性性を重視する項目の平均の中国と日本大学生女子の比較では、日本が3.16であるのに対して中国は3.62であり非常に有意な差で中国の女子学生のほうが男性性を強く認めていることがわかる(原崎・篠原2003)。

更に、各因子を「甘え」の高得点群と低得点群に分けて、両者の関係を見てみよう。表3が両者間に有意な差があった項目の方向性を示したものである。

先ほど見たとおり、大学生女子は『伝統的男性性』を非常に低く評価しているのであるが、『引込み思案』『責任回避』『非自立』『追従』の各甘え因子において、その傾向がより強い高得点群のほうがいずれも伝統的男性性を高く評価していることが明らかになった。自らに積極性の弱さを自覚した甘えを抱えている若者たちが、男性に対して強さを求めていることの表れということであろうか。

これに対して、『屈折した甘え』をも加えて、いずれの甘えも低群、即ちそのような甘えが少ない者たちのほうが、「自分の考えを主張」したり、「自分の考え」や「自分の責任」に基づいて行動をとったり、「自己を素直にPR」できたりするという『自己主張』の因子に含まれ

表3. 甘え因子と生活意識との関係

	甘え因子名	引込み思案		受容承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
		甘えの高群・低群		高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
		高群	低群	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数
57	女性のほうがこまやかな心遣いができる			高>低***									
58	女性のほうが身の回りの世話が良くてできる			高>低***						高<低***			
59	女性は家庭的なほうが良い			高>低*								高>低+	
60	女性は喫煙しないほうが良い									高>低+			
62	男性のほうが決断力がある			高>低+						高>低+		高>低*	
63	男性のほうが度胸がある			高>低*								高>低*	
64	男性のほうが大局的にもの見方ができる			高>低+								高>低***	
65	男性のほうがリーダーシップがある											高>低***	
66	男性のほうが職務に忠実である			高>低+				高>低*		高>低+			
67	男性のほうが社会的成功を追い求める			高>低+				高>低***		高>低*		高>低+	
68	自分の考えはしっかり主張する			高<低***				高<低*		高<低***		高<低***	
69	自分の考えに基づいて判断する			高<低***				高<低***		高<低***		高<低***	
70	自分の責任で行動する			高<低**		高<低***		<低***		高<低***		高<低***	
71	自己を素直にPRできる			高<低***		高<低**		高<低***		高<低*		高<低***	
72	親は私の話を良く聞いてくれた							高<低***					
73	いろいろなときに親はよく慰めてくれた							高<低***				高<低+	
74	親と話すが楽しかった			高<低*				高<低***				高<低*	
76	親にはよくほめられた					高<低**		高<低**		高<低*			
77	親の手伝いを喜んでしていた					高<低**		高<低***					
78	礼儀を守るよう親から厳しく言われていた			高<低*									
79	親は決まりを守るよう厳しく注意していた												
80	親の言いつけを守るよう厳しく言われていた			高<低*									
81	親は言葉遣いを厳しく注意した			高<低*						高<低*		高<低+	

る各項目の得点が高くなっている。

その他、「親が話を良く聞いてくれた」「慰めてくれた」「ほめられた」「親と話をしたり、「親の手伝い」をしたりするのが楽しかったという『親との親和性の因子』や、「礼儀」や「決まり」や「言いつけ」を守るよう厳しく注意を受けたり「言葉遣い」を注意したりするという『親の厳格性の因子』に含まれる各項目の得点は、前述の5つの甘え因子低群の方が、つまりそのような甘えが少ない者たちのほうが有意に高くなっている。これらのことから、幼少期からの親とのかかわり、あるいは養育・しつけの情態が甘えと大きく関連しているということができよう。

『受容・承認を求める甘え』のみは、『伝統的女性性』の3項目において甘えの高群の方が得点が高くなっており、他の各項目については有意な差を示していない。即ち、この『受容・承認を求める甘え』は、われわれの従来からの研究結果と同様、他の甘え因子とは異なった要素を持っていることが今回の調査結果においても認められた。

いずれにしても、学生の生活意識が『甘え』と大いに関連を持っていることが明らかになったといえるのである。

IV. 愛他行動と「甘え」との関係

複雑な人間関係の中で日常生活を送る時、人は、相手からの様々な働きかけに対して、時には腹を立て、時にはじっと我慢をし、又さらには互いに許しあい、喜怒哀楽を分かち合いながら、時を過ごしているものである。我々が取り組んできた「甘え」行動の背景にも、このような問題が大きく影響しているのではないであろうか。

そこで、その様な日常場面について21項目の質問項目を作成して、その関連を見てみたいと思う。

まず、各項目を高得点順に並べたものを図4に示している。図から明らかなように、高得点を取った項目は、「友人が喜んでいるときに共に喜べる (4.22)」、「みんなと協力することができる (3.98)」

など協力することができる (3.98)」、「助けを求められたら気軽に手を貸す(3.92)」、「悩んでいる人の力になってあげる (3.86)」等であり、互いに協力し合える雰囲気、あるいは愛他的行動とでも言うべきものを持っていることがわかる。

一方、3.0未満の項目は「自分の好意を無にされても気にならない (2.52)」、「ボランティア活動をよくする (2.52)」、「宗教的雰囲気を大切にす (2.72)」等の項目で得点が非常に低くなっている。

われわれは21項目の回答結果の因子分析を行ったのであるが、その結果、3つの因子が抽出された。すなわち、「みんなと協力することができる」「誰とでも仲良くできる」等を含む『協調的愛他行動の因子』、「町の中で困っている人に気軽に手を貸す」「ボランティア活動をよくする」「宗教的雰囲気を大切にす」等を含む『積極的愛他行動の因子』、そして、「他人に害を与えられてもそれを許す」「裏切られたと思ってもいつのまにか忘れる」等を含む『許容的愛他行動の因子』である(原崎・篠原2004)。

図4で見た得点項目をこの因子に当てはめてまとめてみると次のようになる。3.0未満であった6項目は「約束を破られてもすぐ又その人と約束する」「裏切られたと思ったことでもいつの間にか忘れてる」「自分の好意を無にされても気にならない」の『許容的愛他行動』と、「進んで障害者と近づきになる」「宗教的雰囲気を大切にす」「ボランティア活動をよくする」の『積極的愛他行動』であるのに対して、上位4項目「友人が喜んでいるときに共に喜べる」「皆と協力することができる」「助けを求められたら気軽に手を貸す」「悩んでいる人の力になってあげる」は全て『協調的愛他行動』である。つまり、人間関係を送る中で、他と協力し合い協調しあうことはかなり良くできるのに対して、許しあったり、積極的に愛他的行動に出たりすることは身につけていないのであろう、その低さが目立つと言える。仲間はずれにならないように、ひいてはいじめの対象にならないように相手の気をそらさないという気持ちを持っているが、実際に愛他行動に出るべき現場に直面したときには、どう行動すべきか戸惑ってしまうのか、あるいはそのような愛他行動に出ることに対する他者からの評価を気にして躊躇しているのであろうか。現代の女子青年の傾向をよく表しているようである。

我々はこの調査と同時期に、全く同じ項目で中国の大学生の意識を問うている。その結果は、日本の女子大学生が最も低い得点を取っている『積極的愛他行動』の得点が非常に高くなっており、前述の3つの愛他行動因子の中でも最も高い得点を示している。このような外国との比較をまつまでもなく、日本の大学生の『積極的愛他行動』の低さは、憂慮すべきものであると言えよう。このことについては他の論文で分析結果を報告する事とする。

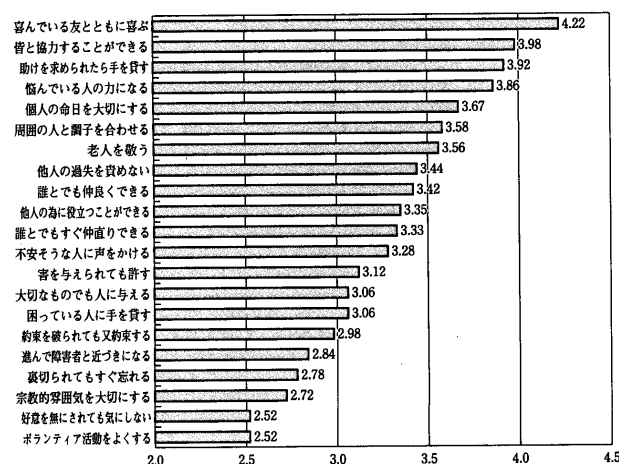


図4. 愛他行動

表4. 甘えの高低と愛他行動との関係

	甘えの因子 甘えの高群・低群 人数	引っ込み思案		受容承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
		高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
		122	105	123	104	111	116	120	107	130	97	143	84
82	個人の命日を大事にする					高<低***							
83	ボランティア活動をよくする					高<低+		高<低***					
84	老人を敬う					高<低*							
85	宗教的雰囲気(気持ち)を大切に					高<低+							
86	進んで障害者と近づきになる					高<低**							
87	周囲の人と調子を合わせていく					高<低*				高>低*			
88	助けを求められたら気軽に手を貸す			高>低*				高<低+				高<低+	
89	自分の好意を無にされても気にならない			高>低***		高<低***							
90	町の中で困っている人に気軽に手を貸す					高<低*		高<低+					
91	他人の過失で勝負に負けても責めない					高<低**		高<低+					
92	友人が喜んでいるときに共に喜べる	高<低*				高<低***							
93	誰とでも仲良くできる	高<低***		高>低+		高<低***				高<低*			
94	不安そうな人を見ると自然に声をかける	高<低***				高<低*							
95	自分の大切なものでも人に分け与える					高<低*						高<低*	
96	他人に害を与えられてもそれを許す					高<低+							
97	他人のために役立つことができる	高<低***				高<低***		高<低***		高<低*		高<低***	
98	誰とでもすぐ仲直りできる	高<低*				高<低***		高<低*					
99	裏切られたと思ったことでもいつの間にか忘れてる	高<低*		高<低+		高<低***							
100	悩んでいる人の力になってあげる	高<低***		高>低***		高<低***		高<低***				高<低***	
101	皆と協力することができる	高<低*		高>低+		高<低***							
102	約束を破られてもすぐその人と約束をする									高<低*			

そこで、「甘え」との関係を見てみたいと思う。

ここでも「甘え」各因子の高群、低群に分けて比較し有意差が見られたもののみを表4に示している。

82から102までの愛他行動21項目全てにおいて何らかの形で「甘え」の高低と有意な関連を示していることがわかる。特に『屈折した甘え』においてその傾向が著しく、殆どの項目で有意な差を示しており、いずれも低群のほうが愛他性得点が高くなっている。『引っ込み思案』『責任回避』『非自立』『追従』の甘えにおいても有意な差を示した項目はいずれも甘え得点低群である。即ち、このような甘え得点は低いほうが、つまり甘えていないほうが、愛他傾向が強いことを示している。

『受容・承認を求める甘え』のみは高得点群のほうが愛他性得点が高く、他の甘えと異なった結果を示しており、ここでもわれわれのこれまでの結果と同様、この甘え因子の特殊性が明らかになっている。

いずれにしても以上の結果から、「甘え」と「愛他性」との関連が非常に強いと言うことができる。

V. 将来の配偶者に期待する家庭内の役割と「甘え」との関係

男女平等がかなり進んだ世の中ではあるが、若者達の捉える社会は、平等という点ではまだまだ満足の行くものではないようである。小・中・高校の生徒の親達に対する調査においても、「家事は誰がするのが良いと思いますか」という問いには、フルタイムの仕事を持っている母親も専業主婦の母親とともに、夫と妻の「できるほうができるときにするのがよい」という回答が最も多い。

しかし、「あなたの家庭では誰が主に家事をしていますか」と問うと、両群とも母親が主に行っているのが実情である(篠原・1992)。

1994年に世界応用心理学会がスペインのマドリッドで開催された折に、日本のこのような結果を発表したが、そのディスカッションの中で、諸外国の研究者達が、自分の国では夫が家事をすることは確かにあるが、それはあくまでも妻の援助であって、ルーチンワークとしての家事は妻がすることが多いという意見が多く出た(坂田・篠原・黒川、1994)。

そこで今回大学生女子が将来の配偶者に何をどの程度期待するかを調査して、甘えとの関係を考察することにした。高得点を示した項目順に並べたものが図5である。尚、全く同じ項目について、将来の配偶者から自分はどの程度期待されると思うかを尋ねた結果を、折れ線グラフで示している。

まず女子学生が将来の配偶者に期待するものから見て行こう。「子どもと一緒に遊んでもらいたい(4.81)」、「健康に気をつけてもらいたい(4.80)」、「家庭の団欒を大切にしてもらいたい(4.72)」、「生活費をきちんと入れてもらいたい(4.70)」等が上位を占めているが、いずれも4.70以上を示している。しかも、28項目中18項目が4.0を超えており、異常ともいえるほどの期待の高さである。卒業後もキャリアを持ち続けたいと望む女子学生が多いことから、結婚後の家庭生活において配偶者に家事分担を期待するという傾向の強さは頷けるものであろう。

只、その中で、「家庭の中の重大問題を決めてもらいたい」は3.36と他に比して極端に低いし、「掃除・洗濯

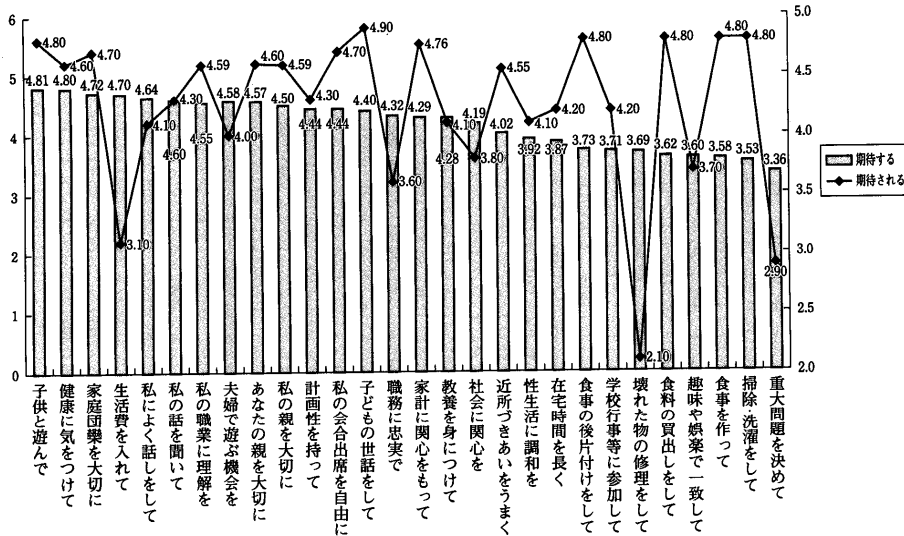


図5. 夫婦の役割期待・被期待

をしてもらいたい (3.53)、「食事を作ってもらいたい (3.58)」、「食料の買出しをしてもらいたい(3.62)」、「食事の後片付けをしてもらいたい (3.73)」等も期待の程度としてはかなりの低さである。つまり家庭生活の中で伝統的に女性の役割であるとされてきたものについては、あえて男性に期待をかけていない様子が見て取れる。ちなみに「生活費を入れる」以外のいわゆる伝統的女性役割を配偶者からどの程度期待されていると思うかを調査した結果は、いずれも4.8を超えて自分に期待されているだろうと回答しており、若者世代においても、家事の伝統的役割分担意識が根強く残っていることを物語っているといえよう。

この結果は前述の「生活意識」における伝統的男性性因子の得点の低さと考え合わせても、女性からの男性性への期待の薄さを十分に物語っているものと思われる。また、幼少期の養育のされ方の項で見たように、母親と

の親和性が強く、幼少期から母親のようにになりたいと思いがながら成長した女子学生が、母親の影響を強く受け、母親の後姿を自らの生きる鏡としていることを物語っているのかもしれない。

「甘え」各因子得点の高低両群別に比較したものを表5に示す。『引込み思案』と『屈折』の因子群では、そのような甘えをあまり抱いていないものたちのほうが、夫への要求を強く持っている。引込み思案が少なく屈折もあまりしていないものが素直に期待を現しているということであろう。これに対し

て『非自立』と『追従』の因子群ではその様な甘えを強く持っているものたちのほうが、夫への期待が大きいという結果が得られている。

また、家庭内の夫婦の役割分担においても『受容・承認を求める甘え』だけは他の甘えと異なる方向性を示していることがわかる。しかも有意差が見られる項目の殆どが、家庭における夫婦の人間関係を穏やかに仲むつまじく保って生きたいという願望が現れていると言えるようである。自らを受け入れ、認めてもらいたいという思いの強いものが夫へもその期待を強く示しているのであろう。

ところでこの「甘え」との関係を見た表に現れていないものに注目してみたい。夫への期待が他の項目より低得点を示した諸項目である。「家庭の中の重要な問題の決定」「掃除洗濯」「食事を作る」「食事の後片付け」「食料の買出し」等の下位5項目が全く姿を表していない。

表5. 甘え因子と夫婦の役割期待との関係

項目	甘えの因子名	引込み思案		受容・承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
		高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
	甘えの高群・低群	122	105	123	104	111	116	120	107	130	97	143	84
	人数												
123	わたしの話を聞いてもらいたい			高>低***									
124	健康に気をつけてもらいたい			高>低*									
126	計画的な持って	高<低+											
127	こわれたものの修理をしてもらいたい			高>低**						高>低*		高>低*	
128	私の親を大切に					高<低+							
129	あなたの親を大切に			高>低*		高<低+							
130	私の職業や活動について理解や援助をして			高>低*									
131	家庭の団樂を大切に			高>低*		高<低**							
132	夫婦で一緒に遊ぶ機会を作	高<低+		高>低**									
133	私の交際や会合への出席は自由					高>低+				高>低*			
134	私によく話しをして			高>低+									
135	在宅時間を多くして			高>低**									
136	性生活に調和するよう	高<低***		高>低***									
138	近所づきあいをうまく			高>低*									
139	家計に関心をも									高>低+			
145	学校行事やPTA活動に参加	高>低+				高<低**							
146	子どもの世話を							高<低*					

家庭内の重要問題決定をも含めて、この5項目はいわば伝統的に女性の役割とされてきたものであるが、このような事柄については自らの甘えに関係なく、夫への期待が他ほど強くないのである。いわゆる家事に関する役割分担を女性の役割とする傾向が根強いことの表れとも考えられる。しかしそれだけではなく、「家庭の中での主（あるじ）は婦（女性）である」ということで「主婦」という言葉があるといわれるように、家庭の中での女性の主導権を守りたいという積極的意向が背景に潜んでいると考えることはできないであろうか。

VI. 日本人的価値観と「甘え」との関係

1. 蟻とキリギリスの結末について

昭和の初期から総理府で調査され続けてきた質問項目の一つにインソップの「蟻とキリギリス」の結末を尋ねたものがある。夏中歌い続けて働かなかったキリギリスが冬、食べるものに困り、働き続けた蟻のところに食べ物をもらいに来たときの蟻の答えを二つ用意し、どちらの回答に近いかを問うものである。表6は1991年の調査結果（篠原・1991）と今回の結果を比較したものである。いずれも「働かなかったのは悪いが今度からは働くのですよと諭した上で食べ物を分けてやる」と回答したものが「怠けていたのだから困るのは当然、と追い返す」という回答を大きく上回っているのであるが、1991年には90%を超えていたこの回答者が、2003年には減少しており、この10年余りの間に日本人的価値観が有意に減少していることが明らかである。ちなみに当時シンガポールでは「諭した上で分け与える」という回答が83.6%であり、日本と比較してかなり少なかったのであるが、今回女子大学生の回答はその当時のシンガポールの回答とほぼ同率に近づいている。世の中の経済状況の低迷を背景

表6. 蟻の回答の年代比較

	1991年 (%)	2003年 (%)
困るのが当然と追い返す	75 (9.8)	34 (15.0)
諭した上で分け与える	729 (90.7)	192 (85.0)
合計	804	226

$$\chi^2=6.091^*$$

表7. 蟻の回答と甘えの平均との関係

	選 択	平均値 (SD)	t 検定
引っ込み思案の甘え	追い返す	13.76 (4.53)	ns
	分け与える	14.69 (4.13)	
受容・承認を求める甘え	追い返す	20.00 (3.19)	*
	分け与える	18.51 (3.83)	
屈折した甘え	追い返す	18.09 (5.04)	***
	分け与える	15.09 (4.55)	
責任回避の甘え	追い返す	14.03 (4.48)	*
	分け与える	12.63 (3.52)	
非自立の甘え	追い返す	17.65 (4.75)	ns
	分け与える	17.91 (3.90)	
追従の甘え	追い返す	13.82 (3.02)	ns
	分け与える	14.01 (3.30)	

(追い返す34人、分け与える192人)

に、「働けない」人々を簡単には切ってしまうことはできないという心情はまだ残っているとはいえ、価値観の変化を伺い知ることができる。

これを「甘え」との関係で見てみた結果は表7のとおりである。

「受容・承認を求める甘え」、「屈折した甘え」、「責任回避の甘え」においてはいずれも“諭した上で分け与える”を選択するものの方が“働かなかったのだから食べ物が無いのは当然と追い返す”を選択したもののよりも、甘え得点が有意に低くなっている。即ち、このような甘えが少ないものの方が、食べ物が無く困っているキリギリスに対して、愛他的行動をとるものが多いのであろう。これは、調査項目は異なるが、先に愛他行動のところで見た結果によく一致しているといえる。

2. 課長のタイプの選択について

総理府が日本人的価値観として調査し続けた質問の2番目に、職場で、「人情課長」と「合理課長」のいずれを選ぶかというものがある。即ち、「仕事の面では少々無理も言うが仕事以外のことで面倒を良く見てくれる『人情課長』と、「仕事の面で無理も言わないが仕事以外のことでは面倒を見てくれない『合理課長』がいたとしたら、どちらの課長のもとで働きたいと思うかを問うたものである。ここでも1991年の結果と今回のものを比較して表8に示している。前回も今回も「人情課長」のもとで働きたいと回答するものが87.2%、84.9%といずれも8割を超えており、「合理課長」を選択したものを大きく上回っている。つまり昭和初期から調査し続けられてきた総理府の調査による日本人的価値観を現代の若者たちも持ち続けているということがわかる。

しかしこの課長の選択は他国の結果とは異なるところである。即ち1991年に調査した時のシンガポールの結果は、「人情課長」のもとで働きたいと回答するものは61.3%に過ぎなかったし、台湾では67.7%、中国でも73.8%だったのである。つまり、他の国においては、「合理課長」のもとで働きたいという回答が日本に比して多く、「人情課長」に対する受け止め方が異なっていたのである（篠原・1991、篠原他・1999）。つまり、日本人にとっては人情味が深く暖かみを感じる「人情課長」であるが、中国人たちは“仕事で無理を言って働かせた上に、個人的な生活にまで干渉するいやな課長だ”との認識をするのである。これに対して「合理課長」については次のようであった。日本人は“特に仕事をさせるわけでもなく個人的面倒も見てくれない冷たい人間だ”と受

表8. 課長選択の年代比較

	1991年 (%)	2003年 (%)
合理課長を選択した者	103 (12.8)	34 (15.1)
人情課長を選択した者	701 (87.2)	191 (84.9)
合計	804	226

ns

表9. 課長選択と甘えの平均との関係

	選 択	平均値 (SD)	t 検定
引っ込み思案の甘え	合理課長	15.12 (3.84)	ns
	人情課長	14.46 (4.29)	
受容・承認を求める甘え	合理課長	18.44 (3.70)	ns
	人情課長	18.78 (3.80)	
屈折した甘え	合理課長	16.50 (4.33)	ns
	人情課長	15.38 (4.81)	
責任回避の甘え	合理課長	13.91 (3.57)	+
	人情課長	12.62 (3.69)	
非自立の甘え	合理課長	17.65 (4.69)	ns
	人情課長	17.92 (3.92)	
追従の甘え	合理課長	14.79 (3.70)	ns
	人情課長	13.82 (3.16)	

(合理課長34人、人情課長191人)

け止めているのに対して他の国では、“無理な仕事もさせない上に、個人的な生活の中にも入り込んでこない理想的な課長だ”と感じているのである。

企業などでの調査で、最近の新入社員の中には「合理課長」を好む傾向がいくらか進んでいるというのであるが、女子大学生たちは現在も従来の結果に準じた日本人的認識をしていることが伺えるのである。

これを「甘え」との関係で見たものが、表9である。表から明らかなおとおり、わずかに「責任回避の甘え」においてのみ「合理課長」を選ぶもののほうが甘え得点がやや高くなっているが、他の各甘え因子では差が見られなかった。つまり、甘えの高低にかかわらず、日本人的価値観を失っていないということであろう。

3. 将来の暮らし方について

上記二つの質問と同様総理府が調査し続けたものに「生き方」の選択がある。

- ①一生懸命働き節約して金持ちになりたい
- ②小さなことにくよくよせずその日その日ののんきに暮らしたい
- ③自分のためだけでなく社会のためになるようなことをして暮らしたい
- ④まじめに勉強・努力して有名になりたい
- ⑤お金や名誉のためだけでなく趣味に合った暮らしをしたい
- ⑥金持ちでなくても世の中の正しくないことを押しつけて清く正しくくらしたい

という6つの質問である。この中の③の質問は、第二次世界大戦のころまでは、“国家社会のため”という表現であったというが、第二次世界大戦後は「社会のため」という表現で調査し続けられているのでわれわれもそれにしたがっている。

今回の結果を1991年の結果と比較したものが表10である。「社会のため…」「清く正しく…」という項目は戦前は他の項目よりも多く選択されていたと言われているのであるが、1990年代にはこの2項目を選択するものが大幅に減少していることがわかる。しかしこの両年を比較してみると大きな差が見られる。まず、“その日その日

表10. 暮らし方の年代比較

	1991年 (%)	2003年 (%)
一生懸命働き金持ちに	92 (11.5)	20 (8.90)
その日その日を呑気に	214 (26.6)	37 (16.4)
社会の為になる暮らし	15 (1.9)	32 (14.21)
努力して有名に	28 (3.5)	10 (4.40)
趣味にあった暮らし	396 (49.2)	106 (47.20)
清く正しく	59 (7.4)	20 (8.9)
合 計	804	225

$\chi^2=68.435^{***}$

をのんきに暮らしたい」という項目を選択したものが大きく減っている。これに対して「社会のためになるようなことをしたい」という項目が1.9%から14.2%へと大きく増加している。金持ちになりたいと思っても見通しは暗いし、のんきな生活などとてもしてはおられないということを若者が強く感じていることの表れであろう。“社会のためになるように…”という暮らし方を選択するものがこのように増加して“のんきに…”暮らしたいものに迫っているということ、また、“清く正しく…”暮らしたいものがわずかではあるが増えていることは、今日の若者が非常に社会的に育ってくれていることを示しているものとうれしく思う。

しかし、甘え因子との関係では「引っ込み思案の甘え」で5%レベルで有意な差が見られた以外では統計的に有意な差が見られなかった。ただ、「社会のため」と「清く正しく」を選んだものはいずれの甘え因子においても、甘え得点の低いもののほうが多く選択していたということは、特筆に価するのではないであろうか。

【要 約】

「甘え」という概念の中には多くの要素が含まれているが、今回は過去の研究結果(篠原・1998)で抽出した6個の甘え因子を用いて女子の大学生に対して調査を実施し、その背景との関わりを検討した。その概要は次のとおりである。

1. 幼少期に両親から受けた養育と「甘え」との関係

大学生の幼少期は、「家族全員が集まって食事」をし、「寝るときに本を読んで」もらっており、「大切に育てられ」ているが「養育の中心は母親」であったことがわかる。更に「自分でできることは自分でする」ように言われて育った者は、『引っ込み思案』『責任回避』『非自立』『追従』の各甘えがいずれも低い。また、「両親から大切に育てられた」者たちは『引っ込み思案』『屈折』等の甘えが低い。即ち、幼少期の適切な育て方が甘えの低減に大いに役立っていることがわかる。

2. 「経済観念」と「甘え」との関係

全ての「甘え」因子が経済観念と深く関わっている。殊に「甘え」得点の高いものは『親のすねをかじる』

傾向が高いが中でも『非自立の甘え』においてこの傾向が顕著である。また、「家庭の経済状態」を熟知しているものや、儉約的、計画的金銭使用を心がけている者たちは、いずれも各甘え因子の低群に多いということが明らかである。

3. 生活意識と「甘え」との関係

『親の厳格性』『親との親和性』等が全般的に高く、幼少期の親の養育態度をよく反映している。しかし、男性のほうが「度胸がある」「職務に忠実である」「リーダーシップがある」等の項目が軒並み下位に位置している。即ち男性に対する信頼感が非常に低いということである。

これを「甘え」との関係で見ると、『自己主張』『親の厳格性』『親との親和性』等は全て、甘え得点が低い者たちに多いことがわかる。即ち、親との関係が良いものは甘えが少なく、自己主張ができるものは甘えの低い者たちである。殊に『責任回避』『非自立』『追従』等の甘えはいずれも甘えの少ない者たちが望ましい生活意識を持っていることがわかる。ただ、『受容承認を求める甘え』のみは他の甘え因子とは異なる様相を呈している。いずれにしても「生活意識」の持ち方は「甘え」と大きく関わっている。

4. 愛他行動と「甘え」との関係

『協調的愛他行動』『積極的愛他行動』『許容的行動』の因子で見ると、女子大学生は『協調的愛他行動』はかなりよくできているのに対して、『積極的』『許容的』愛他行動をとることはあまり育っていないことがわかる。

次に各項目を「甘え因子」との関係で見ると、『受容承認を求める甘え』以外の各甘え因子ではいずれも低得点群、即ち甘えの少ないものの方が愛他行動をよくとっている。ここでも『受容承認を求める甘え』のみは他と異なる様相であることは興味深い。

5. 将来の配偶者に対する役割期待と「甘え」との関係

28項目中18項目において、4.0を超えて配偶者に家事分担を期待している。卒業後キャリアを持ち続けたいと望む女子大学生が多いことから、結婚後の家庭生活において夫に分担を期待しているのであろう。しかし、「掃除・洗濯」「食事の用意」「食事の後片付け」「食料の買出し」等、従来から女性の役割とされてきたものに対しては、夫への期待が他の項目より少なくなっている。「甘え」との関係では、『引っ込み思案』『屈折』『責任回避』の甘え群は、そのような甘えの傾向が少ないものの方が夫への期待が大きく『受容承認』ではその甘えが強いもののほうが期待が大きい。しかし、伝統的女性役割とされてきた項目は一項目も甘えとの関係が見られていない。即ち甘えの高低に関わらず、女性的役割は夫へ期待していないということがわかる。

6. 日本人的価値観と「甘え」との関係

昭和初期から総理府が調査し続けてきた項目の中から3問を抜き出して調査した。

①蟻とキリギリスについて

1991年の結果と比較してみると、いずれも“諭した上で食べものを分け与える”という回答が多いが、この10年余りの間にこの回答、即ち「日本人的回答」が有意に減少している。「甘え」との関係で見ると、『受容承認』『屈折』『責任回避』の甘えに関しては、“追い返す”と回答したもののほうが甘え得点が高い。

②課長のタイプ選択について

この項目では10年間に変化無く「日本人的回答」である“人情課長”を選択するものが多く、外国の回答と大きく異なっている。上司に対する受け止め方の違いを如実に表している。「甘え」との関係で見ると、『責任回避』の甘え以外では甘えの得点に有意な差が認められなかった。

③将来の暮らし方について

この質問項目では、1991年の結果とかなりの変化がみられ、特に、“社会のためになるようなことをして暮らしたい”と、“清く正しく暮らしたい”という回答が増えていることは興味深い。しかも殆どの甘え項目において“社会のために”を選択したものの甘え得点が低くなっている。

以上で見えてきたとおり、現代若者(今回は女子大学生)の甘えの背景には、幼少期に受けた親の養育や、日本人的価値観等が大きくかかわっており、ひいては、生活意識、経済観念、愛他行動、夫婦の役割に対する期待等が甘えと強く関連していることが明らかとなったと言える。

【参考文献】

1. 土居健郎 『「甘え」の構造』 弘文堂 1971
2. 土居健郎 『「甘え」雑稿』 弘文堂 1975
3. 土居健郎 『「甘え」の周辺』 弘文堂 1987
4. 林知己夫 『日本人の心をはかる』 朝日新聞社 1988
5. 李御寧 『縮み』 思考の日本人』 学生社 1982年
6. 統計数理研究所国民性調査委員会 『日本人の国民性(第4)』 至誠堂 1992年
7. 篠原しのぶ 『日本青年の生活意識と老人観に関する調査研究(韓国・台湾・タイの比較)』 中村学園研究紀要20号 1988
8. 日系企業に働く現地従業員の労働意欲とリーダーシップに関する研究Ⅰ(シンガポール・台湾・韓国・日本の調査より)』 中村学園研究紀要23号 1991
9. 加藤諭三 『「甘え」の心理』 大和出版 1994
10. 篠原しのぶ 『日本及び中国における青年男女の「甘え」に関する調査研究Ⅰ』 福岡女学院大学紀要7号 1997
11. 篠原しのぶ・原崎聖子 『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅰ』 福岡女学院人文学研究所紀要 2号 1999
12. 関文恭、吉田道雄、篠原しのぶ、吉山尚裕、三角恵美子、三隅二不二 『働くことの意味に関する国際比較研究(5カ国の大学生の比較)』 九州医療短大紀要 1999

13. 篠原しのぶ、原崎聖子 『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ』 福岡女学院大学紀要人間関係学部編 創刊号 2000
14. 篠原しのぶ、原崎聖子 『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ』 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 2号 2001
15. 篠原しのぶ、原崎聖子 『青年の甘えと社会的適応に関する発達心理学的調査研究』 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 3号 2002
16. 篠原しのぶ、原崎聖子 『青年の甘えと社会的適応に関する教育心理学的研究Ⅱ』 福岡女学院大学 人間関係学部編 4号 2003
17. 原崎聖子、篠原しのぶ 『青年の「甘え」に関する調査（高校生から大学生への比較）』 中村学園大学研究紀要 35号 2003

科学研究費

本論文は、「民族文化の境界領域に関する文化力学的研究（代表者 丸山孝一）」の内、分担研究「子どもの文化習得過程におけるしつけの研究」の第2報である。